考え直して信じる人生

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 出村, みや子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24786

「考え直して信じる人生」

大学宗教主任　出村　みや子

マタイによる福音書二一章二八～三二章

28「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ
行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。29兄は『いやです』と答えたが、
後で考え直して出かけた。30弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、
承知しました』と答えたが、出かけなかった。31この二人のうち、どちらが父親の望みど
おりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。「はっきり言っておく。
徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。32なぜなら、ヨハネ
が来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。
あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

本日選びました聖書箇所は、他の福音書には並行した記事のない、マタイ福音書だけの独自な記事です。父親と二人の息子の物語ということで言えば、ルカによる福音書にある有名な放蕩息子の譬えを思い起こす方もいらっしゃるでしょう。今ご一緒に歌った讃美歌二四三番には、金持ちであったがゆえに主イエスの招きに従いえなかった青年、イエスが捕えられた後に三度そんな人は知らないと否認したペトロ、イエスの復活に際して、その手に釘跡を見、この指を釘跡に入れなければ信じないと言った疑うトマスの三人のことが歌われておりますが、主イエスはこれら三人三様のイエスに対する否定的態度にもかかわらず、なおも彼らを神の国へと招いていることが示されています。そこで本日はマタイ福音書の「二人の息子の譬え」を通して、キリスト教の中心的メッセージの一つであるイエスの招きについて、ひと時ご一緒に考えたいと思います。

マタイ福音書のテクストをご覧ください。冒頭でイエスは「ところで、あなたたちはどう思うか」と問いかけています。ここで「あなたたち」と呼びかけられているのは、その直前の二三節でイエスの権威について問答をしている祭司長、長老たちといったユダヤ教の指導者たちを指していることがわかります。イエスは彼らに向かってこの譬えを語っておられます。譬え話には父親と二人の息子が登場します。父親はその兄の方に向かって「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」と言いましたが、彼は「いやです」と答えました。しかし、後になって考え直して結局は

ぶどう園に出かけていきました。父親が弟の方にも同じことを言うと、彼は「お父さん，承知しました」と大変よい返事をしたものの実際には出かけては行きませんでした。この二人の兄弟の話、みなさんもこれまでの人生の中で自他ともに何らか思い当たる経験をしたことはないでしょうか。「必ず行きます」と返事をしたにもかかわらず、後に行くことができなくなってしまった自分の苦い経験や、来てくれないと思っていた人が、予想に反して来てくれたうれしい経験等、人生には予想外の、自分でも思ってもみないような他者との関わりが様々な形で生じるものです。イエスはこのような譬え話をしてから、彼らユダヤ教の指導者に対して「この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか」と尋ねられたのです。彼らはそれに対して「兄の方です」と答えています。

兄は父親の意思に対して一度は「いやです」と言ってそれを拒否しましたが、しかし後になって「考え直して」その意思に従いました。しかし、弟は「お父さん、承知しました」と言いながら実際には父親の意思に従いませんでした。そのどちらが父親の望みどおりにしたのか、という問いに対して彼らユダヤ教の指導者たちは兄の方だと答えています。譬え話のなかの兄とは一体誰のことを指しているのでしょうか、また弟とは一体誰のことを指しているのでしょうか。それを知る手掛かりが、それに続くイエスの言葉に見出されます。

三一節の後半以下をご覧ください。主イエスは、「はっきり言っておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう」と述べた後に、その理由として「なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった」と告げています。

イエスがこのように「はっきり言っておく」というような言い方をされるときには大変大切なことが告げられる時です。ですからこれに先立つ譬え話は、いわば次のことが告げられる布石となっているのです。その一番のポイントは「考え直して信じる」ということにあるように思われます。先の讃美歌にも歌われていたように、人生の歩みのなかで、罪と弱さを抱えたわたしたち人間が自他ともに予想外の行動をとり、神の意思に背くことはありがちなことです。しかし、後になって考え直して、神に立ち返る歩みをすることがどんなに大切なことか、そのことを主イエスはわたしたちに告げているのです。

ここに出てくる徴税人は税金を取り立てる仕事をしていた役人のことですが、当時のユダヤ教の文脈では、神を信じない異邦人であったローマ人に雇われ、同胞から税を取り立てるのは宗教的に汚れた、神に背く行為とみなされていました。また娼婦は「姦淫をしてはならない」というモーセの十戒に背く職業とみなされていました。ところがそのような人々の方が、神の意思に従って

正しい生き方をしていると自認していた当時の宗教的指導者たちよりも先に神の国に入るだろう、とイエスは言っておられます。これを聞いた当時の人々は皆驚いたに違いありません。イエスの意図はどこにあるのでしょうか。

イエスはここで、徴税人や娼婦たちは確かに一度は神の戒めに背いたかもしれないが、しかしイエスの先駆者として登場した洗礼者ヨハネが来て、義の道、つまり神に従う正しい道を示した時に、考え直して、それに従ったではないか。それに対してユダヤ教の指導者たちは、洗礼者ヨハネの言葉を信じようとはしなかったではないかと告げています。この譬え話で弟に当たるのは、つまり初めは信じているような振る舞いをしていて、結局は信じていなかった者とは、イエスとここで問答をしている祭司長や長老といった当時のユダヤ教の指導者のことを指しています。また、兄に当たるのは、つまり初めは信じていないように見えたが、後になって考え直して信じた者とは、当時のユダヤ社会の中で差別されていた徴税人や娼婦たちのことです。ここには、これに先立つ一九章の金持ちの青年の譬え話の結びの句（一九章三〇節）や、二〇章のぶどう園の労働者の譬えの結びの句にも出てくる「このように後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」（二〇章一六節）という、いわば運命の逆転のメッセージが鮮やかに示されています。

イエスのこの譬えから、わたしたちは一度判断を誤ったり、あるいは道を踏み外してしまった

時でさえも、考え直して神に立ち返る人生の可能性がここに示されていることを覚えたいと思います。なぜなら、イエスの十字架上の死と復活の後、キリスト教宣教の担い手となったのは、人間的弱さと罪にもかかわらず、神の愛と憐みによって、みもとに立ち返ったペトロをはじめとするあの弟子たちであったからなのです。